

箴言 28 章 23 節

「へつらいを言う者より後に、恵みを得る」

2005.10.23 赤羽聖書教会主日礼拝

人を責める者は、
へつらいを言う者より後に、恵みを得る。

説教

今日の話は、子育ての話を一時的に中断して、箴言のみことばから学びたいと思います。

一時的に中断と言っても、子育てに関係のある、重要な話でもあるので、よく聴いていただきたいと思います。

これはソロモン王が悟った人生の教訓です。

「責める」と訳されている言葉は、
「責める、非難する、さばく、有罪と宣告する、叱る、正す、修正する」といった意味です。
人の罪を指摘するような言葉や行動、
その人がそのようなことを言ったりやったりすることで、
他の人の誤ちを明らかにして正すような行為を意味すると思われます。

「へつらい」と訳されている言葉は、
「なめらか、へつらう」という意味です。
ですから、「へつらいのことば」とは、「耳障りの良いことば」と言うことができるでしょう。

誰でも、人の罪を指摘するようなことは言いたくありませんし、したくありません。
世の流れに逆らうようなことをしたくありません。
世の反感を買ったり、世と対立したり、波風立てるようなことはしたくありません。
むしろ、当たり障りのない、人の気に障らない、波風立たないような、耳障りのよいことを語りたいものです。

しかし、ソロモン王は悟りました。

「人を責める者は、へつらいを言う者より後に、恵みを得る。」

人に媚びへつらって偽りを語るよりも、
人を恐れず真実を語る方が、
たとえその時は一時的に損したり苦難を耐え忍ばねばならないとしても、「後に、恵みを得る」というのです。

イエスさまは言われました。

「義のために迫害されている者は幸いです。

.....喜びなさい。喜びおどりなさい。

天に於いてあなたがたの報いは大きいのだから。

あなたがたの前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」（マタイ 5:10-12）

真の預言者はこの世から迫害を受けるのです。

なぜなら、真の預言者は真実を語るのであり、この世は神さまに敵対する罪深い世であるからです。

だから、人々から忌み嫌われて、迫害を受けます。

それで、真の預言者であった使徒パウロもこう言いました。

「確かに、

キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」（ テモテ 3:12）

しかし、義のための苦難はそれだけで終わりません。

後に必ず「**恵みを得る（『見出す、至る』の意味）**」のです。

なぜなら、その苦しみは意味のない苦しみではなく、

世の腐敗を洗い清め、暗黒の世界を照らし、地上に神の国のもたらす「産みの苦しみ」（ローマ 8:22）だからです。

義のための苦難は、真に新しい未来を切り開くためには必要不可欠な「産みの苦しみ」なのです。

このようなことは、歴史の中で、いくつも実例を見つけることができます。

戦時中の神社参拝強制に徹底的に抵抗した「美濃ミッション」という教団がそれです。

1929年9月24日、岐阜県大垣市の常葉神社祭礼の際、大垣市なか中小学校は二時間目の後、神社参拝に出かけましたが、美濃ミッションの教会員の子どもたち4人（小六1人、小三2人、小一1人）が神社参拝を拒否して早退を願い出ました。三名は帰宅できたものの、六年生の桑名トヨ子だけは神社までの同行を強要されました。

養母でもあるワイドナー宣教師（美濃ミッション代表）が

これに抗議したところ、校長・大野富之助は次のように答えたのでした。

- 一、小学校は国民教育場たること。
- 二、神社参拝せずば、国民教育が破壊される恐れあり。
- 三、故に、神社参拝はこの学校の主張である。この学校のみならず、全国的に然りである。
- 四、自分は神社参拝はいかなる事由をもってするも強要す。

このこと（児童が神社参拝を拒否したということ）が大垣市議会で問題となります。

美濃ミッション迫害のための講演会まで開かれます。

翌年の始業式では、大野校長は、顔を真っ赤にしながらかう言いました。

「この学校に神社参拝をせぬような馬鹿者が居る。

神社参拝せぬような者はこの学校に一分一時間も置いとけぬ。

この由家に帰って話し、神社参拝できぬ者はさらに申し出よ！」

それから三年後、同じように、

教会員の息子である樋口繁実くん（六年）が伊勢神宮参拝旅行に参加することを拒否したことで問題が再燃します。

そして、今度は、これが全市を挙げた「美濃ミッション」排撃運動へと展開するのです。

地元の新聞は騒ぎ立てます。

「拙、拙、伊勢参拝を拒む非国民的母親、例の美濃ミッションから！」

「美濃ミッション葬るべし」

新聞紙上では、美濃ミッション排撃を主張する投稿が連日掲載されます。

小学校教師の高木という男が、三度にわたって投稿し、

「日本人として、祖先を崇拜しない者は許せない。」と、

キリスト教と国体思想・神社思想が相容れないと主張します。

同じく東海中学の歴史教師、倉橋賢治郎も、

「キリスト教と国体とは絶対に相容れぬものだ。

一般民衆がキリスト教を信仰せぬのもこれが理由。」

先の大野校長に至っては、極めて卑怯なことに匿名で投稿し、最も過激に紙面でこう呼びかけるのです。

「されば、吾大垣市民がこの際一斉に起って

我が国体の尊厳を冒瀆するが如き議論をなすすべての宗教も宗教家も粉碎せねばならぬ！」

そうして、市内全域に「美濃ミッションを排撃ませう！」というポスターが貼られます。

小中学校のPTAが「弾劾演説市民大会」なる糾弾集会を開いて次のような美濃ミッション排撃を決議します。

- 一、美濃ミッション幼稚園に入園した者は小学校に入学せしめざることを学校当局に要望すること
- 二、幼稚園及び日曜学校児童の家庭を訪問し退園せしむるよう勧告すること
- 三、美濃ミッションの家主に交渉して立ち退かしむること
- 四、大井スミヨ（小五）の出席を停止するよう学校当局へ要望すること
- 五、美濃ミッション排撃運動はすべて学童神社参拝問題研究会と提携して徹底的に行ふこと 右決議す

この席上でも、大野富之助校長はみんなの前に立って、熱弁をふるっています。

彼らは「守れ國体、葬れ邪教」という歌まで作って一般に印刷配付し排撃ムードを盛り上げます。

その歌詞は次のようなものでした。

これは「ここはお国を何百里」の替え歌です。

「六．我が國体の尊厳を、
害なふ彼らミッションの、
排撃目指す我らこそ、
使命に生きる国民ぞ」

「七．血潮漲る憂国の、
^{みなぎ}
^{びじょう} 糜城の健児の力もて、
倒せミッション^{わいどはい}倭異奴輩、
正々堂々最後まで」

ちなみに、これは10番まで歌詞があります。

日曜日には、例の大野富之助校長が、児童たちを引率して「美濃ミッション排撃の歌」を教会の門前で歌わせます。

投石、殴打、そして暴徒たちによる暴動によって、伝道が徹底的に妨害されます。

日曜日の夜の集会前に行われていた路傍伝道の現場に、

神主に率いられた暴徒たちが乱入して妨害し、見物の市民も同調して、次々に石を投げつけました。

ある者は「万歳」を叫んで路傍伝道を妨害し、ある者はひとりの女性の腕を捕まえて肩と頭を殴りつけます。

また、男たちが日本人牧師を取り囲み、怒り狂った群衆たちの中へ引きずり込もうとします。

またある者はつばを吐きかけます。

警察はすでにこの暴動計画を感知していましたが、数名の私服警官が傍観している程度で制止しません。

やがて警官が信者たちに引き上げを命じたため、彼らはミッションの門前まで退却します。

多くの群衆が取り巻く中、今度は美濃ミッションの門の中で路傍伝道を再開するも、

前にも増して暴徒が暴れ出し、遂に美濃ミッションの敷地内にまで乱入して集会の妨害をするに至ります。

かなり時間がたってから、警察が人々を門の外に追い出し、美濃ミッションに自粛を迫って引き揚げます。

その後、焼き討ち計画があるとの通報があり、警察は徹夜で付近を警戒しました。

ただし、これは、美濃ミッションの敷地と建物が、

戸田伯爵の家老屋敷を借用していたため、警察は放火を必死で防いだのであって、

「もし美濃ミッション所有の財産だったならば、たぶん信者もろとも焼き討ちされていたであろう。」とされています。

使徒23章ではありませんが、

大垣市内の四十人の男たちは美濃ミッション粉碎の誓いを立て、ある男はワイドナーのいのちに懸賞金を掛けていました。

在郷軍人会大垣連合分会でも、会長の陸軍中佐、伊藤吉郎は、

「県当局の対応は手ぬるいので、美濃ミッション排撃の烽火を挙げる」との決議文を発表し、

学校、市会議員、さらには岐阜県選出の国会議員大野判睦まで巻き込んで、激しい大弾圧運動が展開されます。

その結果、子どもたちは停学（といっても事実上の退学）処分となります。

ミッションは認可を取り消されます。

さらには、附属幼稚園が閉鎖に追い込まれてしまいます。

結局、強制解散に追い込まれたワイドナーは、極度の心労によって脳梗塞を患います。

そして、1939年12月24日、帰国のため日本を出港した翌日、船中で、失意のうちに召天していったのでした。

しかし、1945年8月15日に日本が敗戦すると状況は一変します。

偶像崇拜を強制して、アジア諸国を侵略していた日本の国は、神のさばきを受けて惨めに敗戦します。

ワイドナーの支援者で、美濃ミッションのアメリカでの会計を担当していた、

ハリー・スミスの息子、リー・ワイドナー・スミスは、進駐軍の一員として大垣市を訪れます。

ハリー・スミスは自分の息子にワイドナーという名をつけるほど、ワイドナーを尊敬していました。

ワイドナーの足跡を知るべく大垣警察署に行くと、

署長以下すべてが困惑と恐怖で緊張して対応し、

「宣教師たちが六年前にこの地を去ってから、建物などは空襲で焼失した」と説明し美濃ミッションの跡地に案内しました。

五百人ほどの市民が彼らを取り囲んで成り行きを眺めていましたが、

美濃ミッションの信者であったと名乗り出た者はひとりもいませんでした。

ただし、その時、美濃ミッションのメンバー全員が信仰を捨てたということではなく、
少なくとも、三名の牧師たちが、
1941年の太平洋戦争、1942年の治安維持法改正によって拘束され、
資料によると、最後までワイドナー宣教師から受け継いだ自分の信仰告白を貫いております。
一人は刑務所で栄養失調で危篤状態になったため、病氣保釈され、療養所で敗戦の日を迎えます。

1948年秋に新教育委員会制度となり

大垣市が公選制の教育委員会を発足させた時、初代の県教育委員にあの大野富之助がトップ当選します。

しかし、翌年、

戦前の悪行について文部省から調査が入り、

美濃ミッション排撃大弾圧の指導者であったことが知れ、

進駐軍より「教育者として不適格」として罷免される直前に辞任します。

こうして、美濃ミッションを迫害していた者たちは、敗戦後、屈辱を味わうこととなるのです。

美濃ミッションが迫害の渦中にある間、当時の教会はどうしていたでしょうか？

要するに、

美濃ミッションの信仰を異端視し、

自分たちの信仰と彼らの信仰は違うのだ、

彼らと同類に扱われるのは迷惑千万、

自分たちは神社参拝もするし、宮城遙拝もする、

熱心に神社参拝に励むクリスチャン大臣松岡洋右を例に挙げながら、

美濃ミッション以外の日本の教会は、

自分たちも含めて国体に反することは何一つしないと主張して、自分たちに迫害が及ばないよう弁明に努めました。

今度証言集会を行う日本基督教会大垣教会の牧師・朝倉重雄は、次のような美濃ミッション反対を主張しました。

「祖先・国忠士を祭る神社に低頭して敬意を払うのはキリスト教信仰に何ら差し支えない。

愛する美濃ミッションの方々、国体と神社を正しく認識し、問題を繰り返さぬように祈る。」

結局、この牧師は、

戦後も民衆の機嫌取りのような発言を繰り返し、地元の宣教の妨げとなってきた、と美濃ミッションの牧師は総括しています。

他の宣教師たちも、

迫害の原因はワイドナーのやり方が悪いからだ、「ワイドナーのやり方が迫害を誘発した」と非難しました。

ある指導的な宣教師はこう言いました。

「我々は皆ミス・ワイドナーに賛成する。

しかし、この問題に限って、沈黙は黄金である。」

そうやって、人々に媚びへつらって生き残りをはかろうとするも、結局は、彼らも追放されます。

しかも、政府によってではなく、（外国人への反感が高まった）自分たちが牧会していた現地の教会によってです。

彼らも神のさばきを受けたのです。

しかし、日本の敗戦により、ワイドナーの信仰こそが本物であることが証明されました。

子どもたちを停学にした堀弘之（当時）教頭は戦後こう評価しています。

「聖書の神以外は拝せずとの美濃ミッションは、徹底した信仰者だった。」

やはり、「人を責める者は、へつらいを言う者より後に、恵みを得る」のでした。

その人が罪を犯して神のさばきを受けて滅びようとしている時に、その人の機嫌を取ってどうなりますか？

当時の牧師・宣教師たちのように、世の人にへつらってどうなりますか？

神のさばきを受けて、世も滅び、自分も滅び、神の栄光もあらわれないし、何一つ良いことはありません。

正しく生きなければなりません。

正しく語らなければなりません。

悪いことは悪い、間違っていることは間違っていると、「人を責めた」方が、その方がよっぽど人のためになります。

よっぽど神の栄光をあらわします。

腐敗した世を洗い清めます。

世界を造りかえます。

地上に神の国をもたらすのです。

宣教師たちのように、当時の教会のように、罪人にへつらっても、何にもなりません。

罪と呪いと滅びしかありません。

「人を責める者は、 へつらいを言う者より後に、恵みを得る」

このみことばをしっかりと肝に銘じ、

ここに集うみなさん一人一人が、

たとえ見た目にはどんなに困難に思えても、

決して安易に妥協することなく、神さまの前に正しく生きて行かれるよう、

そして、この尊い信仰の遺産を、私たちの子どもたちに正しく継承していきたいと、心から祈ります。